

「ならん、ならん。こしょういぶしにでもしてくれよか。」  
と言ってみると、

「うん、こしょういぶしならがまんする。そやけど、だいじなしっぽだけには、油なんかぬらんどくれ。しっぽに油ぬられると、もう化けれんようになるって、おっかさんが言ったものと、ボン吉が言いました。」

「たわいないものよ。自分のほうからはんねなんかはきよって。」

お坊様は、そのままボン吉を逃がしてやろかと思っただけど、ちよいとだけ油をぬってみたくなくて、庚申堂のすぐわきの小屋から、つぼに入った種油を持ってくると、ボン吉のしっぽにポタとたらしめました。

すると、ボン吉のしっぽは、するりとあなからぬけてしまいました。

「おほうさま、ほく、おほうさまに勝ったよう。」

ボン吉は、こりやしまったと、ポカンとしておるお坊様をふりかえりふりかえり山へ帰って行きました。

それからというもの、だれ言うもなく庚申堂の木戸のふしあなへしっぽを入れたためきのことを、とんちたぬきとよぶようになったとき。

清水 みすず

## 大杉の観音さま



## 大杉の観音さま

むかしのことよ。

大原に利助とおよしというめおとがおつてな。ふたりは、いつしよになって七年にもなるというのに子どもがなかった。そのせいか、豆をちぎりに行くのもふたり、田の草を取りに行くのもふたりというように、いつもなかようくらししておつたと。

あるとき、利助がおこりにかかつてそりやあ高い熱が出た。からだがぶるぶるふるえて、ふとんの上から何人がかりかで、おさえておつてもふるえがおさまらなんだ。そこで、利助はなわでぐるぐるにまかれてな、戸板にのせられて大杉の下まではこばれたと。

そのころ大原では、おこりにかかった者は、なわでぐるぐるまきにして、村はずれの大沢にそびえる大杉の下に、ねせておくことにしておつた。そして、そばに立っておらつせる観音さまにあとをたのんで、ひと晩じゅう病人をひとりつきりにしておくと、ふしぎなことに、つぎの朝にはつきもんでもおちたようになおつてしまったそうなの。

およしは、利助を木の下にねかせると、村の衆といっしよに家へもどりかけたが、よつほど利助とはなれるのがつらかつたのやろ。あともどりして利助のそばへ行くと、もう、ようはなれなんだ。みんなは、

「およしさ、利助をこんな所にひとりしておくのはつらいやろが、お前さんがいつまでもそばにおりやなおらへんぞよ。」

と、かんでふくめるように言い聞かせたと。

およしは、そばにおつたらなおらんと言われて、しかたなしにもどつてはきたが、心配で心配でたまらなんだ。ごはんを食べる気にもなれん。ふとんをしいてみてもねる気にもなれん。

「えらがつて、おしをよんでおらつせるやないやろか。」

そう思うともうしんぼうできずに、家をとび出した。

一ばん上の彦さの家をすぎると、あとは大杉までくわ畑と竹やぶがつづいておるだけやった。ふだんならとても女ひとりじや通れる道やなかつたが、およしはいとわずかけつけた。

黒うそびえた大杉の下で、利助はやつぱり、まんだふるえておつた。

「おまえさまノすまなんだわな。ひとりにしておいて。どうかしつかりしとくれ。」

およしは、利助にすがつて言った。そしてせなかをいっしょうけんめいにさすつてやった。それでも利助のふるえは、ちつとも止まらん。それどころか、およしのからだまでつられてふるえた。およしは、観音さまの前にすわりこんだ。そして、

「観音さまノどうか早ううちの人をらくにしてやつてくだされ。おしをかわりにしてくだされ。どうか早うなおしてやつておくんさされ。」

と、地べたに顔をすりつけていっしんふらんにおがんだ。

およしがおがみくたびれて、声も出んようになったころやった。

「これ、およしよ。わたしが利助りすけのかわりになってあげよう。そのなわでわたしをしぼるがよい。観音かんのんさまがそう言わしたと。およしは、むちゅうで利助りすけのなわをほどくと、

「もつたいないことやが、どうかおたのみ申します。」

と、となえて、観音かんのんさまにまきつけた。

すると、あれほどふるえつづけておった利助りすけのふるえがうそのようになおってしまったと。

こんなことがあってから、大原おおはらの衆しゆは、だれぞおこりにかかる者があると、大杉おおすぎの観音かんのんさまをしぼって身がわりになってもらうようになった。

東 紀子

# 水 弘 法

